

「さうなり」——『撰集抄』注釈余滴——

野崎典子

『撰集抄』諸本において、「さうなり」に関連する箇所をすべて拾い上げてみると、一二箇所あり、それぞれのように書かれているか、厳密に読んだものが次の表である。

表の見方

○諸本は、略号によって示した。

橘…橘本本

松…松平本

龍…龍門本

鈴…鈴鹿本

近…近衛本

四…慶安四年刊本

貞…貞享四年刊本

陵…書陵部本

大…大林院本

小…小林本

寛…内閣文庫寛文八年本

静…静嘉堂本

吉…吉田本

三…慶安三年刊本

文…文化七年刊本

東…東大本

射…射和本

嵯…嵯峨本

『撰集抄校本篇』『撰集抄—松平文庫本—(影印)』(共に笠間書院刊)に用いたものと同じである。

○巻話・行数も、前記二本に用いたものと同じである。

○欠は、欠本或いは欠話、(欠)は、該当する話はあるが、問題としている語も、その前後の文も欠けていることを示す。
○／は、問題としている語の無いものである。

※1…「さなり」と一応読んだが、「さうなり」とも読み得て、判読のむずかしいもの。

※2…同右

※3…「さうなしかは」とつづく所で、該当語を「さうなし」とは採らず「さう」とした。

※4…「サウナク」としたが、「サウナリ」と読めないこともない。

※5…「サラナリ」と書き、「ラ」の上に重ねて「ウ」と書き直し訂正。仮りにミセケチ記号を用いて示した。

※6…書き直しはないとみるが、この「ウ」の形からすると「ラ」を「ウ」としたとみえなくもない。

※7…「サラナリ」の「ラ」を「ウ」に訂正するは明らか。仮りにミセケチ記号を用いて示した。

※8…同右

略本	静嘉堂 本系統						書陵部 本系統				鈴鹿本 系統					松平本 系統	系統	略号 行	巻話	
嵯	射	東	文	三	吉	静	寛	小	大	陵	貞	四	近	鈴	龍	松	橋			
／	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	サウナリ	欠	※1 さらなり	さうなし	さうなし	さうなり	さうなり	欠	／	欠	79	一一二	①
左右なし	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	サウ□虫損	欠	※2 さらなり	左右なし	左右なし	さうなし	さうなり	欠	さうなり	欠	90	一一二	②
欠	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	サウナリ	欠	さらなり	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	欠	さらなり	欠	202	一一四	③
さうなり	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	(欠)	サウナリ	※3 さう(なしかは)	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さう也	さら也	さら也	1110	三十四	④
さうなり	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	サラナリ	※4 サウナク	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	さう也	さうなり	さなから	さなから	1168	三六	⑤
さうなり	さう也	(欠)	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さなり	欠	サウナリ	さらなり	さうなし	さうなし	さう也	さう也	さう也	さら成り	さらなり	1912	五十二	⑥
さうなり	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	欠	サラナリ	※5 サウ	さうなし	さうなし	さう也	さう也	さうなり	さらなり	さらなり	2168	五十九	⑦
欠	／	／	／	／	／	／	さう也	欠	サウナリ	／	／	／	／	／	／	／	／	2205	五十二	⑧
欠	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さら也	欠	サラナリ	さうなり	さらなり	さらなり	さうなり	さうなり	さうなり	さら成	さらなり	2259	五十二	⑨
さうなり	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	欠	※6 サウナリ	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	さらなり	さらなり	3464	七十五	⑩
欠	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	欠	※7 サラナリ	さうなり	さうなし	さうなし	さう也	さう也	さう也	さらなり	さらなり	3575	七八	⑪
欠	さう也	さう也	さうなり	さうなり	さうなり	さうなり	さう也	欠	※8 サラナリ	さうなり	さう也	さう也	さう也	さう也	さうなく	さらなり	さらなり	3862	七十五	⑫

上の表に示された語は、

- (イ) さうなり (サウナリ・さう也・さなり)
- (ロ) さらなり (サラナリ・さら也)
- (ハ) さうなし (左右なし・サラナク)
- (ニ) さなから

の四種で、「さうなり」で統一されているのは、静嘉堂本系統の諸本のすべてであり、その他は混合されている。その混合の様相は、おのずから諸本の系統及び諸本の性格を示していることに気付く。すなわち、松平本系統は松90行の「さうなり」、橋松¹¹⁶⁸行の「さなから」を除いて大方「さらなり」で「さうなし」はなく、またの場合も橋本本と松平本の間に異同はない。鈴鹿本系統は(イ)(ロ)(ハ)の混合であるが、「さらなり」は四貞²²⁵⁹行のみで、この表における「さうなし」の全用例一四例中、一三例を持つことは特異である。書陵部本系統も(イ)(ロ)(ハ)の混合であるが、先に※4の説明をしたように、この(ハ)の「サウナク」は(イ)になり得る例であって、そうなければ(ハ)は一例もないことになる。(ロ)の「さらなり」(サラナリ)は松平本系統に次いで数を見るが、その数をはるかに越しているのが(イ)である。静嘉堂本系統は先に述べた通り、すべて(イ)の「さうなり(さう也)」で統一されている。略本(嵯峨本で代表させた)は欠話が多いので判断がむずかしいが、79行のように松平本と同じくする所もあり、また90行のように鈴鹿本系統と何らかの関係がありそうにも思われる。

このように(イ)(ロ)(ハ)が入り組んだ様相を呈した理由は何であろうか。その解明のために問題としている語を含む文章(松平本によるが該当箇所は故意に□として示す)を見てみることにしよう。

①日数へにければ妻子聞得て彼所に來侍りてとかくこしらへ侍りけれと敢て返事もし給はす弥々念仏をそし給ける

□何しか道心もさむへきなればこしらへかねて帰り侍りぬ。

②本の聖も哀に思てよゝとなくめりさらにいつちへかおはへきこれにてもろともに念仏し給へかしといへは□いつちへか帰るへき一所に侍らんこそ本意ならめと云て

③宮のうちの人ゝ是を聞給て殊に哀み思はれるにや□さこそかなしくもをはしあひ給けめな

④此殿の方はらにてと思て侍りこちなくや侍らんと給はせければ殿をかからせ給て□何かはと仰の有ければ⑤あやしの物やとおほして見給へは清水寺の宝日聖人にていまそかりける僻目にやとよく見給へと□まかふへくもあらさりければかきくらさるゝ心地して

⑥或時人の食をもちて行たりければ今日よりも五日はさしな入給そちとつゝましき事侍りといふ□ことうけして約束のまゝに五日さしも入侍らす

⑦やゝ久程経て此吏返てしか／＼といへは□うるせき人ゝこそ侍らめ誰ゝにもいさなゐつれてかくといはんにはなとかとてあまたつれて行たるに見え給はす

⑧最愛の子なん侍りけるか病におかされて医家薬を尽し陰陽術を極しかとも露しるしなくてつゐにはかなく成にき父母かなしふこと理に過たり□さこそは侍りけめかくて五旬漸すきて

⑨常に後の世の事を思はん人は口に悪きこと葉をはき手にわろき振舞侍れ共心うるはしく侍らむには□けるにや侍らんと或聖と打語て

⑩或女の水をいたたきて行けるを仲算大徳つかれ侍りちのとうるゑむとあるに此女云様貴けなる聖の水をもわかし出してのみ給へかし我ゝかはる／＼の所よりからうして汲たる物を乞給ふへき理なしと答へければ此大徳□さらは水をわかつてのみなんとて山の岸に走り寄て剣を抜て山のはなを切給ひたりければ冷しく清き水の滝のこ

とくにて流いて侍りけり

⑪合坂山に駒をはやめて遠きをしのきてまいりあつまりて高き卑き市をなして道もさらにさりあへす□さこそ侍りけめ事もけたゝましき程なり

⑫尼の泪を流して念仏する侍り深く思入らん人とはみゆれともあまりにかほより始てきたなくおはするはいかにさまではあらしはやと人ゝいひければ□さそきたなくおほすらんされと思ひ給はす女身なればさまざまならかならはそゝなる事いひてほひならぬことも侍るへし

とあり、⑨のみは(イ)か(ロ)のどちらかがなければ文章は続かないが、その他の①②⑧、⑩⑪⑫の場合は、「さうなり」「さうなり」「さうなし」などの、これら問題の語がなくとも文章として成り立つ箇所で、「当然のことである」とか「まようことなく同意する」といった意志を強く示す語として存在して、その場合、(イ)(ロ)(二)のいずれが挿入されても良いものである。平仮名の「ら」と「う」、片仮名の「ラ」と「ウ」、或いは「り」と「し」が誤写され易い字であり、現に卷三—二話¹⁰⁴行「乞食かたわら」とか、卷五—一五話²⁴⁰行「ひさらと云ふ薬」の例のように「う」を「ら」と誤写したと思われるものもあるので、どの時点でも誤写された可能性は大いにあるのであるが、『撰集抄』に相当数ある「さうなり」を「さらなり」の誤写の結果に帰するには「さうなり」の力が大き過ぎて無視はできないのである。が、残念ながら『撰集抄』以外の用例を現在までに見付けていない。他の作品に於いても「さうなり」を「さらなり」と今まで読まれて来たものが存在するのではないかと近頃しきりに思うのである。

誤写されたにしても、その誤写に受け入れられるものがなければ、これだけの数が、その誤写のままの形で残されるわけではない。つまり「さうなり」の語が存在していて、受け入れられるものでなければこれ程多くの数の用例はないであろうというのである。「さうなり」が通用していたかどうかという問を解く鍵は、大林院本¹にみつけることが

できそうである。

⑧のように、他の本には記されていない箇所独自に挿入しているのは「サウナリ」であり、先に表の見方※印に記したように「サラナリ」と書いて「サウナリ」に訂正しているものが四例あり、⑨以外のすべてが、最終結果「サウナリ」となっていることである。

我々は松平本系統の橋本本・松平本を『撰集抄』の最も古態を残している善本とみているが、この「さうなり」に關していえば、②のみが「さうなり」であって、まだ一般的に通用する語として「さうなり」が受け入れられない時期に書写された姿を残しているものとみる。そして中世のいつのころからの新造語「さうなり」が奇異に感じられることなく受け入れられるようになった過程を、鈴鹿本系統・書陵部本系統・略本系統が示し、静嘉堂本系統のものでは「さうなり」はすっかり定着したものとみたい。これは『撰集抄』諸本の成立と大いに関係がある結果となった。

〈注〉

1 ；説話文学会大会（昭和五五年六月二日）において「新出大林院本『撰集抄』について」と題して渡邊信和氏の紹介されたものである。詳しくは近く刊行の影印本『撰集抄―大林院本・小林本―』（勉誠社）をみていただきたい。

2 ；安田孝子・梅野さみ子・野崎典子・河野啓子・森瀬代士枝共著『撰集抄校本篇』（笠間叢書139）解説及び『撰集抄―松平文庫本―』（笠間書院刊）解説を参照されたい。